≪しゅる……≫
（体を揺らす音）

リリウ
「あの、先ほどから目線が……私の足と言いますか、足の間と言いますか。
その、見てらっしゃいます……よね？　やっぱり、気になりますか……私の、女性の場所……」

リリウ
「……ガーターベルトって、いうらしいんです、これ。
えっと、脚（あし）の魅力を、増す衣装……って言ったらいいんでしょうか？
そういうものだって、教わって……ちょっとだけ、興味があったので着けてきたんですけど」

リリウ
「宜しければ……もっとよく、ご覧になりますか？
貴方がそうしたいなら、構いませんよ？
それが、貴方の懺悔に繋がるなら……どうぞ」

≪しゅる……≫
（裾を、更に持ち上げ、下着を見せつける音）

リリウ
「ご覧になって、下さい。
どうぞ、しゃがんで……間近から。
足元から見て……このガーターの上まで。
そして、あぅっ。私の……見え、ちゃってる……アソコ、も。……んっ！」

≪がた……っ≫
（許され、座り込む音）

リリウ
「あっ……んっ！
やっぱり、ちょっと恥ずかしいです……ね？
こんなマジマジと、足を見られた経験……私、ないので……んんぅっ！
あぅ、と……吐息が、貴方の息が足に当たって、そこが……暖かくなるから、何処見られてるのか分かって……
はぅっ！」

リリウ
「だん、だん……息が、上って（のぼって）きてるの……わかり、ます……んぅっ！
足元から、膝に……太腿（ふともも）に、段々、段々上がって。っ、ぁっ！？　あぅ、ぅぅんっ！
い、き……が。今……当たり、ました。
はぁ……私の、ソコ。女の子の、場所……んんぅ。エッチな、場所に……息が当たり、ました。
はぁ……ふぅ……んんぅ、息、ずっと当たって……そんなに、じっと見てるんです、か？」

リリウ
「……あぅ。分かってましたが……濡れて、しまっているから、息が余計分かって……意識、しちゃいます……ね。
んっ……ふふ♪　貴方が私を望んで下さったから溢れた蜜だからこそ、余計にそう感じるのかと思うと、なんだか……んっ！
私が、こうされたかったみたいで。くすぐったい、気持ちになります……♪」

リリウ
「んぅ……息が、荒くなってきてらっしゃいます、か？　肌に……蜜に当たる息が、強く……熱くなってるの感じます。
……興奮を、されてるんですね？　貴方の、傲慢な罪が……膨らんで、いらっしゃるんです、ね？」

リリウ
「ふふ♪　本当に、お好きなんですね？　足と……アソコが♪
……出して、みせて下さいますか？　貴方の罪が、今どうなっているのか。
私に、貴方の罪を……感じさせて下さい」

≪じぃぃぃ……ぼろんっ≫
（ズボンを脱ぎ、見せる音）

リリウ
「わっ！　……それが、貴方の、罪、なのですね？
こんなに荒々しく、硬く、熱く……そそり立っているものが、貴方の。
すごい、こんなのを……皆、懺悔として受け入れているんですね。うわぁ……」

リリウ
「あっ、その、申し訳ありません！　つい、私の方がまじまじと見てしまって。
お伝えしていた通り、見習いなので……その、初めて見たものでして。
こんなに、迫力があるものなんて、思っていなかったんです。……こんなにも、力強いモノなのですね。
男の方の、場所というのは……えっと、おちんちん、って呼ぶんですよね、確か？」

リリウ
「あれ、違いましたか？　その、他のシスター達からそう教えられていたので。
あとは、おちんぽ、ペニス、肉棒（にくぼう）、陰茎（いんけい）、ちんこ、イチモツ、男のアレ……えっと、他にもあったかな？
色々な名前を教えられましたけど、おちんちんが一番多かったと思ったので、そう呼んでみたのですが……違い、ましたか？」

リリウ
「あ、おちんちんで良いのですか？　あは♪　合っていたなら、良かったです♪
では、おちんちんを介して、貴方の罪をはらさせて頂きますので……ふふ♪」

リリウ
「まずは……貴方の罪を、教えてくださいます、か？
傲慢は、その……自分で言うのは恥ずかしいですが、神の僕（しもべ）である……私に、欲情をしてしまった罪、という事に致しますので。
あとは何か……そうですね、何か強く怒りを覚えた記憶などは御座いませんか？」

リリウ
「成程……上司や知り合いからの理不尽な行動や、望まぬ事で予定を変更させられてしまう……といった事等でしょうか？
成程、どうしようもなく抗えなかった理不尽に怒りを感じると……確かに、そういった事はあるかもしれませんね。
それは憤怒の罪になるかと思います。……正当なものであれ、邪道なものであれ、行き過ぎた怒りになってしまうと道を誤ってしまう原因になる事がありますから」

リリウ
「……はい、告白をして下さり、有難う御座います。
その罪。私でどうか晴らして下さい。
やり方としては……そうです、ね。色々やり方があると聞いてますけど、うーん……。
貴方は今、私の足と……アソコに、興味を持って下さっているようですし」

リリウ
「……足、で。貴方のモノをその……擦って、我慢して頂くというのは、どうでしょう？
足でも、心地よくなって頂けると聞いていますから……あっ、ちょっと待って下さいね！」

≪がさごそ……きゅぽん！≫
（服に入れていた瓶を取り出し、栓を抜く音）

リリウ
「ふふ、これがありました！　えへへ……これはですね？
聖水を使って罪を晴らすために、神父様が聖別をして下さった……聖水ローションですっ！
しっかりと祈りの言葉も捧げられている、れっきとした聖水なんですよ♪
これを足の部分に垂らせば……ひゃっ！？　思ってたより冷た……んんぅっ！」

リリウ
「あぅ……しみ込むと、ちょっと変な感じです……けど、どうでしょう？
これで、ほらっ！」

≪ぐちゅ……ぬちゅ！≫
（ローション塗れの足の音）

リリウ
「あは♪　ぬるぬる足の完成ですっ♪

これでおちんちんを擦ると、おちんちんもぬるぬるになって……罪をいーっぱい、吐き出したくなるそうですよ？
ふふ、気に入って頂けましたか？」

≪ぐちゅ……ぬちゅ！≫
（近づいたローション塗れの足の指を動かして鳴る音）

リリウ
「これで、怒りや傲慢さに負けて道を踏み外してしまわぬよう……罪を意識しながら、それを我慢して頂きたいと思います。
……では、良いですか？　今から、足で貴方のおちんちんを……触りますからね？　それでは……んっ！」

≪ぐちゅ……くちゅぷぅ！≫
（ローション足がイチモツに絡む音、以下背景でうっすらと流れ続ける）

リリウ
「んっ、すごく……ぬるぬる、ですっ。
足でこんな風に……すると、すぐに外れちゃいそうで……中々、難しい、です……ねっ！」

リリウ
「んぅ……おちんちん、足から逃げてしまって、上手く……擦れな、んんっ！
むぅ、罪だけじゃなくて……貴方のおちんちんも、傲慢です、ね！
もう……両足で、抑えたらもうちょっとやり易くなる……かも？　こう、でしょうか……んっ！」

リリウ
「んっ、しょと……あっ、良い感じですっ♪
片足は、添える感じにして支えにすると、足でも動かし易くなってきました！
それに、ちょっと……コツが、掴めてきたかも、しれないです……んっ！」

リリウ
「あ、んっ。ぐじゅ、ぐじゅ……言ってます。貴方のおちんちん……♪
罪が、溜まってきてるって……んっ、ぬるぬるでも分かるくらい熱く、硬く……なってきてます♪
あ、は……♪　気持ちよく……なってきて、下さってます、よね？　ふふ♪」

リリウ
「でも、ダメ……ですよ？　そんな簡単に……罪を、吐き出しては……いけませんから、ね？
傲慢さや、怒りに……流されないよう、耐えるためにこうしているのもあるのですから！
足で、シているのも……貴方の大事な場所であるおちんちんを。申し訳ないですけど、私の足で、こうして弄るという。
く、屈辱も感じて頂くためにワザとやっているのです、から！　興味があって、興奮されてるだけじゃ……ダメ、なんですからね？」

リリウ
「んぅ、こうして……足を広げて弄って、いるから……んっ！
また、貴方の視線が……私の足と、アソコを……じって見てるの、分かります……んぅっ！
そんなに女の子の場所を見て、興奮して。
あ、足などという……本来、このように使うべきではないモノで、しかも私のような……力の弱い女に、好きにされてしまっているのに。
罪を、こんなに溜め込むというのは……男として、は……恥ずかしく、ないのですかっ！？」

リリウ
「きゃっ！？　い、今足の間でおちんちんが跳ねましたっ！？
お、怒らせてしまいましたか……？　ご、ごめんなさい……でも、これは我慢を覚えて頂くために有効な方法らしいのです！
その、怒りが溢れない（あふれない）ギリギリを感じて頂くために、心苦しいですけど、こうして口汚い言葉を使う必要があるようなのでっ！？」

リリウ
「え、その……気になりませんでした、か？　えと……それもそれで我慢して頂くためなので、困ってしまうのですが。
……もっと、足でしながら罵倒して良いのです、か？　はぁ、まぁ……気にならないのでは、意味もないですからそれは構いませんが。
い、いいんですね？　私……も、もっといっぱい、罵倒しちゃいますからね！？」

リリウ
「で、では失礼ながら……。
こ…こんな、いやらしくガチガチにしたおちんちん、女の子に向けて、恥ずかしくないんです、かっ！
足の間で、聖水ローションでぬるぬるになりながら、足蹴にされてるのにこんなに熱くて、ビクビクさせてっ！
えいっ、えいっ！　いやらしいっ、ダメおちんちんですっ！
えと……お、男の人として！　は、恥ずかしく思う、べきだと思いますっ！」

リリウ
「こ、こんなパンパンに膨らんだおちんちんさせてるから……！　ご、傲慢だったり……怒っちゃったり、するんですよっ！
は、反省して下さいっ！　そして、我慢を……し過ぎちゃ、ダメですけど！
て、適度に我慢して……悪徳を積まぬよう、頑張らなきゃ……ダメっ、なんですからねっ！」

リリウ
「気持ち、いいですか？　罪を、感じていらっしゃいますか？
すごく、私の足でびくんびくんってさっきから、いっぱい……ローションのぬるぬるとは別のぬるぬるが、おちんちんの先からも出てますしっ！
でも、まだ、まだです……まだもうちょっとだけ、我慢しなきゃダメですよ！
こんな、理不尽に……足で、おちんちん弄られちゃうような事をされても我慢出来ればっ！
他の時でも、理不尽な目に合っても……きっと、耐えられるようになりますからっ！

貴方も、ビクビクのおちんちんも……我慢出来る立派な方だって、胸を張れるようになります、からっ！」

リリウ
「ぁぅ、貴方のおちんちん……足で、擦ってるだけなのに、私のアソコも何だかぬるぬるが強く……んっ！　……何でもないですっ！！
ビクビク、すごく強くなってます。もうちょっと、もうちょっとだけ……んっ、んっ！
ここで、出したら……情けない、ダメダメおちんちんとか、そんなひどい事……言っちゃいます、からねっ！」

リリウ
「すごい……足が、全部ぬるぬるに……なっちゃって……はぅっ！
もうローションなのか、貴方のおちんちんから出た液なのか、分からないぐらいぐちゅぐちゅになってる……なっちゃってるっ！
いいです、いいですよ！　よく、よく我慢して下さいました！」

リリウ
「貴方の、罪……私の足が、いっぱいいっぱい、受け止めました……からっ！
酷い事言われても、我慢して下さったのも……全部、ちゃーんと……見てました、からっ！
もう、いいです……いいですよっ！　頑張って下さって、ありがとう……ございましたっ！
さぁ、どうぞっ！　楽に、なって……罪を、全部……吐き出しちゃって、下さいっ！
んっ、んっ！　んっ、しょ、んっ……そ、れぇっ！！　だし……ちゃえっっ！　だし、ちゃって……くだっ、さいっ！！」

≪どくっ！　どくぅっ！！　びゅる、びゅるぅううっっ！！≫
（精液が足からガーターまで飛ぶ射精の音）

リリウ
「きゃっ！？　わっ、わわっ、わぁぁっ！！？？
あつ、熱いの……こんな、いっぱいっ！？　わっ、きゃっ！？
足が、どくどく言ってる……ぬるぬるが混ざって、白く暖かくなってく……。
ぽたぽた……いっぱい飛んだのが、太腿にも、私の……アソコの近くにも、跳ねて……わぁっ！」

≪ぐちゅ……にちゅ、にちゅ≫
（足に絡んだ精液とぬるぬるを、足の指で確かめる音）

リリウ
「すごい……こんなに、ぷるぷる、どくどく、ぐちゅって足に絡んでる。
わぁー……こんなに、罪を貯めていらっしゃったんじゃ、それは……お辛かったですよね？
あぅ……まだ、足にビクビク当たってる」

リリウ
「……どう、でしたか？　色々、酷いことを言って我慢もさせてしまいましたけれど。
懺悔して……すっきり、されましたか？」

≪しゅり……≫
（うなづく音）

リリウ
「んっ……満足して頂けたのなら、良かったです♪
途中で、怒ってしまわれたのかと思った時はドキドキしましたけど……ふふ♪
貴方が、懺悔のために我慢されてる姿は、何だか愛らしく（あいらしく）思えて……私、ちょっと楽しかったです♪
あと、すごく一生懸命……私の、大事な場所、見て下さってて。……えへへ♪
恥ずかしいですけど、私なんだか嬉しかったんです♪」

≪ぐちゅ、くちゅ……≫
（身を起こして近づいて、ぬるぬるの足元が動いた音）

リリウ
「所で、傲慢と憤怒の懺悔はおききましたけれど。
あの……もう。懺悔を終えられます、か？
その、7つの大罪という位ですから……まだいくつか、懺悔されたい事……あったりしないで、しょうか？」

リリウ
「もし、まだあるのでしたら。
今日は、私も初めて懺悔を聞かせて頂いているというのもありますし。
良ければ、まだ……お聞きしたいなぁって、思うんですけど……如何（いかが）でしょう？」

リリウ
「もしあるならばいっぱい……貴方の罪、教えてください。
私、もっと貴方の告白を聞いて、貴方の懺悔に合わせて、色々……させて頂きたいです。
ダメ……でしょうか？」

≪にちゃ……ぐちゅ≫
（お願いをされ、思わず動いた体のぬめる音）